

## 編 集 後 記

- 『西南学院史紀要』第7号発刊のために、ご多忙の中、執筆にご協力くださった諸氏に心よりお礼を申し上げます。それぞれの記事が建学の精神を明らかにするために「西南学院の歴史を記録する」という、本紀要の第一義的使命に貢献する内容であることを嬉しく思います。
- 2011年は、大学が先駆的に国際交流を開始して丁度40年目という節目を迎えることもあり、本号は、西南の国際交流がどのような経緯で今日に至ったかを振り返る意味で「西南学院と国際交流」を特集し、それに関連する座談会を持ちました。G. W. バークレー学長、小島平夫大学国際センター長、鶴身淳一郎高校国際交流委員より、それぞれに西南学院における国際交流の歴史と、将来の展望について有益な示唆を頂くことができました。
- 座談会「大学の国際交流40年―その歴史と展望―」では、今日、海外の大学は、本学の留学生別科が提供している日本研究に関する一般教養科目ではなく、各分野の専門科目が履修できる各学部、研究科との協定を希望するケースが多くなっていること、さらには、未だ少数ではあっても、他大学においては英語による授業での学位取得のできる学部・学科の開設も進んでいるとの報告がありました。本学の国際交流における先駆的取り組みを想起して、ここは国際交流のさらなる進展に向けて新たな踏み出しが期待されます。
- 柴田道明氏による西南学院高校の歴史的事物の解説は非常に興味深いものがあります。大学東キャンパスの北側にあった「皇紀二千六百年記念」碑撤去の記事は、保存すべき歴史的事物の取り扱いを協議する責任部署を明確にしておくべきであったことを思わされました。
- 塩野和夫氏の論考「日本キリスト教史研究の現在」は、百年史編纂への方向性と示唆に富むものであり、優れた構成と内容を持つ百年史編纂へのよき足がかりと言えます。
- 「西南と戦争」シリーズの坂本譲氏による「部史に隠れた歴史を掘り起こす―戦没者の記録―」及び吉田一之氏による「戦前・戦中の苦難の時代を学生として過ごす―西南学院存亡の危機を身をもって体験―」は、それぞれ西南学院史にとって貴重な証言です。本学院の「戦争責任」をさらに内実あるものとするためにも戦死者の調査等はこれから本格的に取り組むべき課題であることを教えられました。
- さて、本紀要発行の責任主体である百年史編纂委員会は、小林と伊藤邦厚副委員長の3月末の定年退職に伴い、この4月より、(新)委員長：金丸英子神学部教授、(新)副委員長：大杉晋介総務部長兼100周年事業推進室長、(新)委員：宮崎克則国際文化学部教授、委員：伊原幹治中学校・高等学校長、委員：安高啓明大学博物館学芸員、委員：世戸口尚英100周年事業推進室主幹、記録：高松千博100周年事業推進室員という新たな陣容で出発することになりました。4年および5年後の百年史の資料編および通史編の発刊の責任を担う、これら委員諸氏への、これまでにまさるご支援とご協力をお願いいたします。

(小林洋一)